My Favorite in Harp's song

ハープ　私の1曲

『ドビュッシー：神聖な舞曲と世俗的な舞曲』

第14回 石丸 瞳

本コーナーも最終回を迎えた。今まではハープに携わってきた方々の中で、特に成果を残してきた方の半生を、ひとつの曲をモチーフに据えながら、時には人の一生まで変えてしまうハープ曲の素晴らしさを紹介してきた。今回は次代にバトンを渡すという意味でも、フレッシュな方に登場願った。今年行われた草加国際ハープコンクールで優勝した、石丸瞳である。

物事が成就するのに、結果が全てということも言えるが、それに対して「どう対処したか」という要素が、結果の先にある未来を大きく左右するのではないだろうか。石丸のスタートは遅かった。中学校の部活紹介で、管弦楽部が演奏する「花のワルツ」を聴き、そこでハープに一目ぼれして入部。ちなみに、その時ハープを弾いていたのは、今はドイツ在住のハーピスト南志歩で、二人は後に大学で早川りさこ門下の姉妹弟子となる。部にハープが1台しかなかったため、中1の時はヴァイオリン担当、中2でやっとハープ担当になれたという。そうした経緯からも、おそらく彼女には他と比べて練習のための時間が圧倒的に少なかったと言える。それでも栄冠を手にしたのだから、才能は元よりかなり濃密な時をハープに捧げて来たことだろう。

転機となった曲として、石丸は「ドビュッシー：神聖な舞曲と世俗的な舞曲」を挙げた。奇しくも草加の本選の課題曲でもあった。彼女は、マルギット=アナ・シュスに師事、2年間オーストリアのグラーツで薫陶を受けてきたが、この曲は最も長く時間をかけて勉強した曲だという。「この曲を学び、和音のバランス、音色、間の取り方や体の動きなど、表現するための引き出しがかなり増えた気がします。わずか10分ほどの曲ですが、0.1秒タイミングが変わったり、ちょっと和音のバランスが違うだけでも全く印象が変わってくる、恐ろしく繊細な曲です」という。冒頭の2小節だけでレッスン終了ということもあったという。以降、ドビュッシーに取り組む度に悩みまくるというが、度々はさむ「理想の音」という言葉にキーワードが隠れているように思えた。

この曲は、ドビュッシーが半音階ハープ（クロマティック・ハープ）のために、元々はプレイエル社の依頼で書いた曲だ。弦の数を増やせば演奏もより容易になるだろうという狙いがあった。後に、エラール社が作ったいま主流のペダルハープに取って代わられた。つまり、この曲はオリジナルの趣向とは違った形で弾き継がれている曲で、言い換えれば弾きやすさを放棄して現存していることになる。それだけに、奏法としては微妙な感覚のニュアンスを要求されることとなった。背景を知ってか知らずか、石丸の語る「0.1秒の違いにこだわる理想の音」にこそ、彼女の過去と未来が凝縮しているようにも思えた。しかもその研鑽が、自分の音が聴き手にどう響いているのかに向けられていると知り、演奏の本質も掴んでいると感じた。登竜門を通過したばかりだが、このこだわりがある限り、将来も楽しみなハーピストとなるに違いない。

EVENT SQUARE イベント・スクエア

1/18 15:00開演 東京・Hakuju Hall　第164回リクライニング・コンサート
上野星矢(フルート)&山宮るり子(ハープ) デュオ・リサイタル

1/22 14：00開演　大阪・枚方市総合文化芸術センター関西医大小ホール
気軽にクラシック!平野花子（ハープ）&松永加也子（ピアノ）

2/12 14:00開演 東京・サントリーホールブルーローズ
吉野直子 ハープ・リサイタル 2022〈ヴァイオリンとチェロとともに〉

3/11 19:00開演 東京・千代田区立内幸町ホール
菊地恵子「カロランの世界とアイリッシュハープのしらべ」

The Last Chorus

ご愛顧頂いてきたハープライフは、急なことではございますが　来る本号をもちまして休刊することとなりました。皆様には、並々ならぬご支援を賜りまして、誠にありがとうございました。なお以降につきましては、現在展開中のハープライフWEBの方へ装いも新たに統合となりますので、今後ともご理解とご協力のほどお願い申し上げます。ハープライフWEBの方でまたお会いしましょう。

情報寄稿先：harplife@ginzajujiya.com　発行人/倉田恭伸　編集人/森　泰義　2021年12月発行

A MAGAZINE FOR THE HARP PLAYER

HARP LIFE

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー

Vol.20
TWENTIETH ISSUE

12
2021

山宮るり子
インタビュー

好評連載 最終章：
井上久美子ライフストーリー⑥

残していきたい
オ・カロランの詩/菊地恵子

季節のおすすめハープ
Vol.20
OGDEN

3年間ありがとう。

来年からはWEB版でお会いしましょう。

From Niigata to the world

新潟から 世界へ

Conversation with Ruriko Yamamiya
山宮るり子インタビュー

新型コロナウィルスの蔓延以前から、どの分野でも日本人の留学生が海外で激減しているという事実がある。欧米に追いつけ追い越せで、貪欲に物事を吸収し続けてきた日本も、気が付けばリードする側になっており、学ぶものが少なくなったのかもしれない。だが、技能の分野は人が人へ継承してゆくものであって、第一級の技を習得するにはその技術を持つ人に会いに行かねばならない。ハープもまさに、伝承を受けたいのならば、欧米にその答えがある。きっかけを活かし、出会いを信じ、ハープ・ドリームを体現したトップ・ハーピストがいる。山宮るり子である。

新潟からハンブルクへ

お母様が、地元の新潟でヴァイオリン教室を開いていたことで、山宮は2歳からヴァイオリンを習っていた。だが、当時の新潟のオケではハープを弾く人が誰もいなかったので、母からハープを勧められたという。この辺りも母親ならではの慧眼だし、自身もヴァイオリン弾きであればこそ、熾烈な競争のなかで自己主張してゆく難しさも感じていたのかも知れないが、ともかく山宮は母の知り合いのハーピストを訪ね、その後月に一度は上京してハープの練習に没頭し始める。転機は、中学3年の頃に訪れる。来日していたグザヴィエ・ドゥ・メストレのレッスンを受け、メストレから留学を勧められたというのだ。言わずもがなメストレといえば、ハープ界の最高峰。皇帝とも呼ばれる奏者だ。普通ならば、「褒められちゃった、嬉しいー。でも、留学なんて無理」とか、「きっと、メストレ先生も気を遣って言ってくれただけだ」というリアクションで、行動には起こさないだろう。しかし、とどのつまり、人と人との機会を真摯に受け止め、自分を信じて動いたものでないと、実際の果実をもぎ取ることはできない。山宮は動いた。新潟から、ハンブルクへ。

ヨーロッパで学んだこと

ハンブルクを目指した理由も明確だった。メストレに習えるのが、ハンブルク音大だけだったからだ。生一本というか、真実一路というか、こうした山宮の行き方は実に潔い。その後、8年ほどドイツに滞在し、ハープを学んできた。さぞかし多くのテクニックの習得に没頭したのだろうと思いしや、本人からは意外な言葉が返ってきた。

「テクニックより、曲の表現の仕方、音楽をどう聴かせるかを、主に習いましたね。コンクール前でも、練習ばかりでなく、綺麗な景色を見たり、散歩することも大事と云われ、よくヨーロッパ中を旅行していました」。

・・・なるほど、音楽の素晴らしさを伝える者として、心に余裕とか豊かさが宿っていなくては、聴き手にも感情が伝わらない。カツカツに根詰めて練習した鬼気迫る演奏よりも、やはり音の楽しさを伝えるほうが、より響くということを教わるのだろう。かくして、山宮は「リリー・ラスキーヌ国際コンクール」で優勝という快挙を成し遂げる。ハープ王国のひとつフランスの冠たる賞であり、あのサーシャ・ボルダチョフですら優勝できなかった難関である。そこで全審査員一致で栄誉に浴した。奇しくも「音楽とは、心の言語である」との言葉を残したハーピスト、リリー・ラスキーヌのコンクールでの戴冠。人知れず苦労を重ね、聴き手の心にどう響く音楽を弾けるかに腐心し、新潟でのひとつのきっかけと出会いを頼りに今を引き寄せた山宮には、実は最も相応しい賞だったのかもしれない。

自粛ムードがまだ漂う中、2022年も新春から山宮は、コンサートを精力的に開催する予定だ。工藤重典とモーツァルト「フルートとハープの協奏曲」を、その後はやはりフルートの上野星矢との共演、ヴァイオリンの西江辰郎との共演と目白押しだ。会場できっとあなたも、山宮の心の音楽に触れることができるだろう。

TV出演情報：
BSプレミアム「クラシック倶楽部」

2022年1月24日（月）午前5:00〜5:55

▲アイリッシュハープを弾いてるころ（5歳、始めて2年目頃）

▲リリー・ラスキーヌコンクールの本選にて

独占
連載手記

夢は
ハープと共に

井上久美子ライフストーリー

KUMIKO INOUE

1968年夏ザルツブルク 最終章

A life filled with harps

思い出のひと夏・・・

1968年7月の国際ハープウィークでのリサイタルが終わってほっとしていたら、ハープウィークを聴きにいらしてたモルナール先生から突然、本当になんの前触れもなく「久美子、これから私と一緒にザルツブルクにいきますよ!モーツァルテウムに参加します」といわれたのです。「行きましょう」ではなくて「参加します」でした!

▲デビューリサイタルの様子

毎年8月にザルツブルクの音楽祭と並行して開かれていて(アメリカのタングルウッド音楽祭などと同じような感じでしょうか?)これからを目指す若い音楽家や音楽学生が、ひと夏を世界中の素晴らしい音楽家とともに過ごし、彼らから学び、自分たちも演奏する場として有名でした。

その年はモルナール先生が、ハープの講師として招かれていらっしゃいました。結局、私は3週間ザルツブルクに滞在し、絵のように美しい街をたくさん歩き回り、オペラやオーケストラ、室内楽、コンチェルトなどにも参加しました。モルナール先生のお母さまもいらしてくださり、一緒に楽しいときを過ごしました。

そこでも、私の一生を左右する出会いがありました。たまたま、シュトゥットガルトの指揮者のミュラー氏が私の演奏を大変気に入ってくださり、シュトゥットガルト・フィルハーモニーのドイツとオーストリアの演奏旅行にソリストとして招いてくださったのです。さらに演奏会の後で、シュトゥットガルト・フィルのソロ・ハーピストとして来てほしいと言われたのです。

でも、結局この素晴らしい申し出は、とても残念でしたけれどもお断わりをいたしました。なぜかと言うと、翌年の1969年4月にはアムステルダムのコンセルトヘボウのリサイタルホールでのデビュー・リサイタルが決まっていたこと。そして両親に「デビュー・リサイタルの後に帰国します」と約束していたこと、日本でも活動を始めたかったこと、などのためでした。人生にもしもはありませんが、その申し出を受けていたら? きっと全く違う世界が待っていたことでしょう。1968年のザルツブルクでの夏は、こんな素晴らしい経験と出会いのあった、とても思い出深いひと夏でした。ここで改めて、強引に誘って下さったモルナール先生に感謝です。

▲汽車の中でモルナール先生と

素晴らしい出会いに感謝

コンセルトヘボウでのリサイタルでは、思いもかけず素晴らしい新聞批評をたくさん頂き、ベルクハウト先生も大変喜んでくださいました。、私も聴衆の反応がストレートに感じられて気持ちよかったのをよく覚えています。そして1969年9月末に帰国し、3日後に主人と出会い、今年で結婚50年となりました。

何という運命かと、いまでも思います!

その後も素晴らしい出会いと経験がたくさんありましたが、いまでも忘れられない思い出は、レナード・バーンスタイン指揮のニューヨーク・フィルハーモニーが来日して一緒に演奏したとき、個人的にバーンスタイン氏とお話ししたことです。マエストロは非常にフランクで優しい方でした。でも、その指揮は初めての私にとってはとても分かりにくく、必死で彼の棒を見ていたのを鮮明に思い出します。またズービン・メータとイスラエル・フィルハーモニーの来日のときも一緒に演奏しましたが、メータ氏の指揮は非常に分かりやすく、明快で、彼の音楽に自然と入り込んだ記憶があります。世界の巨匠とご一緒出来たなんて今思うと夢のようです。

▲レナード・バーンスタイン(左)と

▲1971年2月14日結婚

一年間書いてまいりましたこの連載も、これで最終回となりました。いままで一年間ご愛読くださいましてありがとうございました。厚くお礼申し上げます。これまで手紙以外に文章など書いたことがない私が一年間も続けられたのも、私の担当となった山本佳子さんの支えがあってこそです。そして私に快く自由に書かせてくださった銀座十字屋の皆様に心から感謝を申し上げたいと思います。　了

●筆者略歴:東京藝術大学大学院在学中にオランダ政府の奨学金を得て留学。以後、世界各国で演奏、コンクールの審査員、指導を行う。現在、世界ハープ協会コーポレーション・メンバー、武蔵野音楽大学特任教授、日本ハープ協会副会長。

特別楽譜企画

O'Carolan, Forever!

残していきたい オ・カロランの詩（うた）

監修・菊地恵子

トゥールロホ・オ・カロラン（ターロック・オキャロラン）とは?

アイルランドの伝説的ハープ奏者/作曲家。200を超える曲を遺したと云われ、アイルランド最後の吟遊詩人、国民的作曲家とも称されています。18歳で天然痘のため失明したものの、50年に渡りアイルランド各地で楽旅を続けました。

演奏のポイント

伝統音楽は古くから口頭伝承によって伝えられた歌とダンスの音楽によるもので、楽譜にして残されませんでした。代表的な楽器であるハープは5音音階の構造をもつ曲が多く、アイリッシュ/ケルト音楽の演奏には装飾音/装飾音符が欠かせません。

メロディはクリアな音色に対し、装飾音はメロディを特徴づける響きの趣があります。メロディはアクションをつけた演奏に対し、装飾音はアクションをつけないで演奏します。

曲の背景について「カロランのコンチェルト」

カロランのハープ音楽は民謡とクラシック音楽の枠を超え、18世紀アイルランドのバロック音楽という背景も感じられます。最も有名な音楽家の一人で「国民的作曲家/ アイルランド最後の吟遊詩人」と称せられ、アイルランドの伝説的な盲目のハープ奏者にして作曲家でした。今日知られているだけで200を超える曲を遺し、彼の哀愁を誘う作風は、広く国民に愛され、今もなお多くの人に弾き継がれています。

この曲は,ゴールウェイ州でデーヴィッド・パワーというパトロンに仕えていた時に作曲されました。ヴィヴァルディやコレルリの影響を受けたイタリア風の曲であり、おそらくエリザベス・パワーを称えて作曲されたものと思われ、メイヨー州の領主に仕えていたイタリア人作曲家・フランチェスコ・ジェミニアーニと競作の結果生まれた曲であると言われています。イタリア調におおいに影響を受けた作品で、バンティングは盲目のハープ奏者アーサー・オニールから蒐集しました。バンティングはオルガン奏者でしたが、1792年にベルファースト・ハープ・フェスティヴァルが開催された際、既に著しく衰退していたアイルランドの伝統的ハープ音楽を五線紙に記録し、後世に伝える為に雇われました。彼はアイルランド音楽を蒐集し、保存する為にその人生を捧げました。

(註)「Ó ～」は、本来「～の孫(子孫)」を意味するアイルランド語（ゲール語）の姓の形式で、アイルランド語では、カロランなどと姓のみを呼ぶときには省いて称します。

「シーベグ・シーモア」

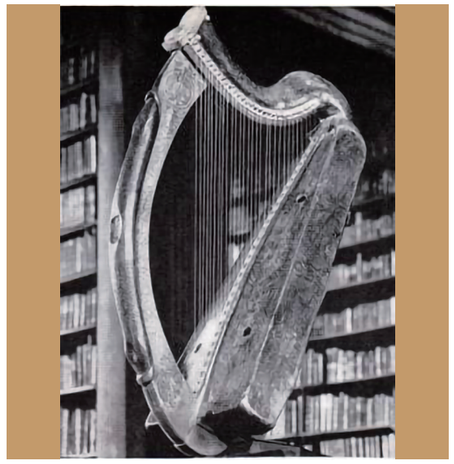
1691年に作曲された、カロランの魅力ある最初の作品として有名です。シーベグとは小さな妖精、シーモアは大きな妖精という意味で、この名前がついた二つの丘に住む妖精の間で行われた妖精同士の戦いにまつわる曲です。ダニエル・アーリーの原稿「カロランの生涯」によれば、21才でハーパー(ハープ奏者)としてのキャリアを打ち立てる為に、カロランは最初にリートリム郡のリターフィアンにある貴族のジョージ・レノルズの家を訪れました。レノルズは当時のアイルランド人がそうしていたように、アマチュアのハーパーで詩人でありましたが、彼の演奏の拙さを指摘し、作曲の主題に近くの二つの丘に住む妖精の間の伝説的争いを聞かせ、作曲の才能を試したと言われています。彼は、出来上がったこの曲を大層気に入り、もっと作曲の才能を伸ばすように助言し、励ましたと伝えられています。このこともあって、カロランは生涯曲を作り続けることになりました。

尚、この曲の出典は、1793年ベルファーストで発行された「Ballinascreen & H.Joy」という本になります。バンティングによれば、「The Bonny Cuckoo(小さい山と大きい山)」から生まれたと言っています。

(註1)ハーパーとは、アイリシュ・ハープ奏者の称号。

(註2)旧地名バリーナスクリーン、現在のマネーモアは、大きなやぶや大きな丘を意味し、デリー県にある。H.Joyは、United Irishmenという組織の創立者の一人。

ブライアン・ボルー・ハープ



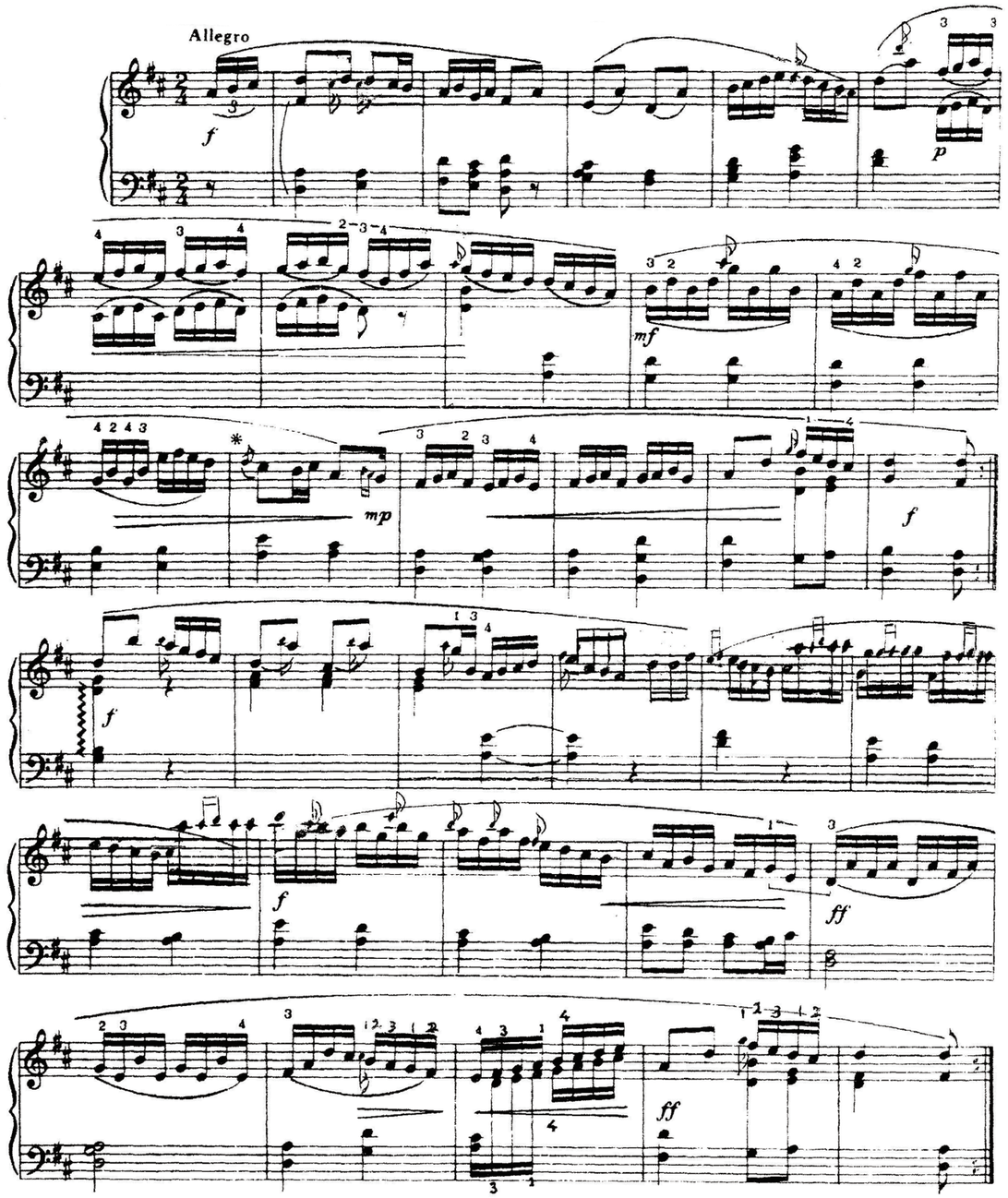
さて、13世紀以来、アイルランドの紋章には「ブライアン・ボルー・ハープ」または「トリニティ・カレッジ・ハープ」といわれる美しいハープが描かれています。

このハープは1014年のクロンターフの戦いでバイキングの侵略者を撃退し、その戦いで戦死したアイルランド最初の大王ブライアン・ボルー王に結びつけられています。

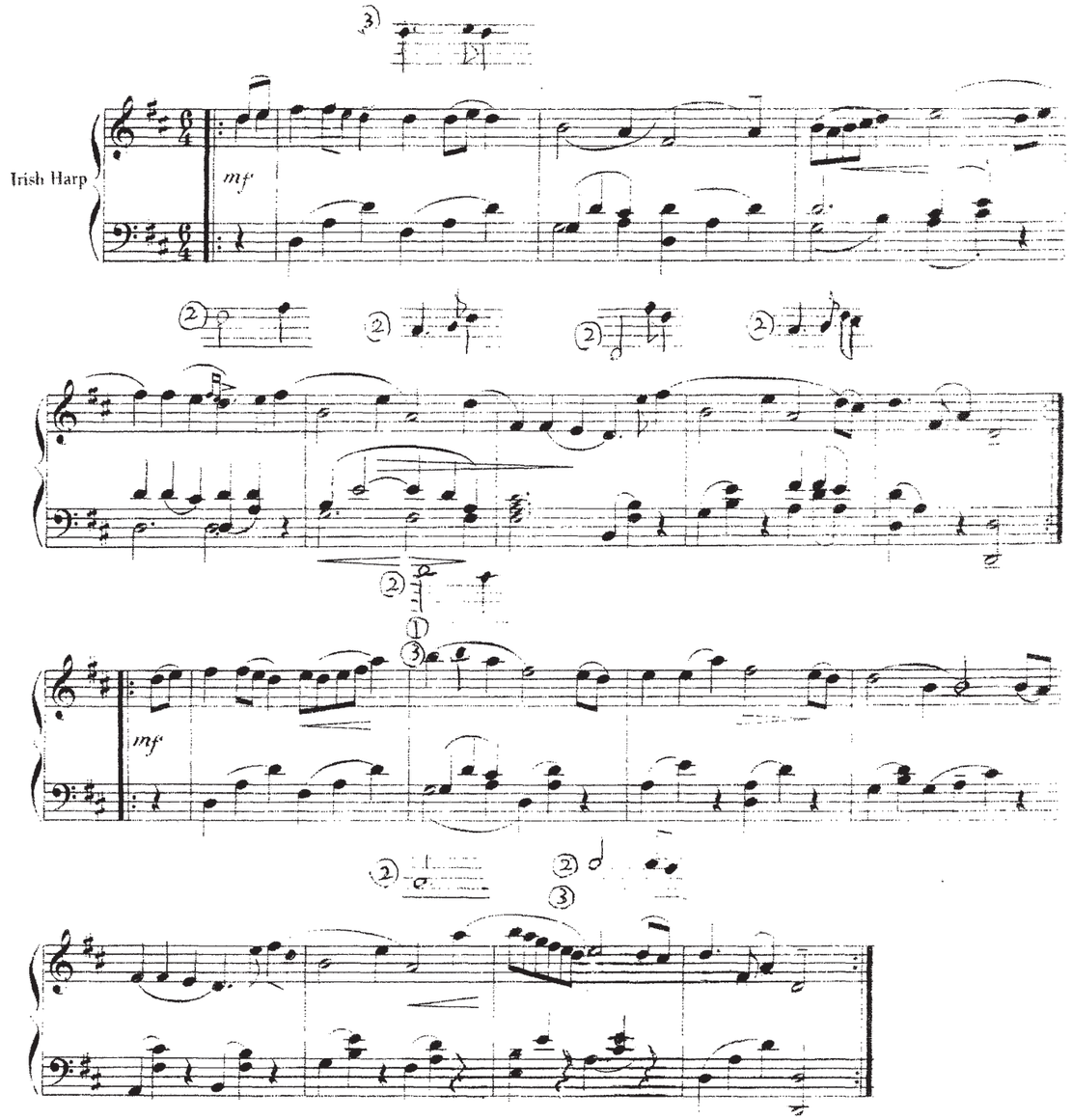
1782年にトリニティカレッジに贈られ、その大学の名前でも呼ばれています。このハープは、実際には15世紀の初期のものであると結論づけられています。

O'Carolan, Forever!

カロランのコンチェルト



シーベグ・シーモア



O'Carolan, Forever!

Harp Life CD Collection

ハープライフ選定 ハープ銘盤コレクション

時を超えて、いつまでも残しておきたい、
ハープの銘盤CDをご紹介してゆく
コーナーです。

Harp Life
GOLD DISC
第10回

「ザ・エッセンシャルハープ／サラ・ブレン」

アルバムを制作する際に、アーティストには様々な想いが去来すると思う。いまの最善を記録に残すとか、新たな曲を世に問うとか、目的は多々あっても、詰まるところ少しでも多くの人に、培ってきた音楽の成果を聴いてほしいというところに尽きるのだろう。

サラ・ブレンの場合、自身の一里塚として発表した「ザ・エッセンシャルハープ」に、「継承」の意味を込めたようだ。NYフィルからシカゴ交響楽団の主席ハーピストまで、オーケストラの一員として活躍すると共に、ソリストとしてもその力量を認知されている。しかし、どうやら彼女のフォーカスは教育にその多くが向けられているように思う。ルーズベルト大のハープ教授、マンハッタン音楽学校のハープ議長職を経て、オンラインのマスタークラスにも精力を傾けている。その少し硬質だが耳心地のよいサウンドと、メリハリを聴かせた弾き方は、堅実さと正確さを感じさせ、派手さはないが本物の響きを感じさせる。そんなブレンが、ソロで伝えたいこととはなんだろうという問いの答えは、自らの生き方をそのまま音にしたような内容だった。

ブレンの世代は、いまはレジェンドとなった近代ハープ中興の祖らから、愛弟子として直接手ほどきを受けた最後の世代だ。グランジャニー、ミルドレッド・ディリング、スーザン・マクドナルドが、彼女の師だ。ブレンは、何ら奇を衒うことなく、師たちの曲を取り上げ、「こうあるべき弾き方と、然るべきサウンド」を展開する。まさに、時代の息吹とレッスンの息遣いが感じられるほど、恐らく自らが習った通りの音を再現する。それはオリジナリティに欠けるということではなく、時代を超えて大切かつ最良だと思えるハープのエッセンスを伝えようという気概に溢れている。たとえ意識していないにせよ、良い音楽を継承する役目を自ら任じているかのような選曲は、一見お堅いようだが、中身は芳醇で業師である彼女の機智に富む音で溢れかえっている。

お買い
求めは、
こちらから!

季節のおすすめハープ

Vol.20

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なハープ。
今回は、「オグデン」です。

豊かな鳴りが印象的なオグデン。

今回ご案内するのは、オグデンです。少々変わった響きのネーミングですが、実はライオン&ヒーリー社のすぐ近くのストリートから採った名前なのです。つまり、「親しみのある、常に身近なハープであるように」という意味も込められているのです。

2007年頃の同社は、需要の見込めるレバーハープについての思案を巡らせていました。アメリカは日本のように土地は狭くなく、グランドハープも問題なく置けるユーザーが大多数でしたが、一方でグランドは入門用には大きく、持ち運びの不便さから、音楽のポータビリティを求める声が高まっていたのです。無論、ハープ・ユーザーの裾野を広げ、潜在的グランドハープ・ユーザーを育てるのに、レバーハープはうってつけと考えられたわけです。ハープをもっと身近にという合言葉から、慣れ親しんだストリートの名を冠したのも、アメリカらしい発想と言えます。

暖かく均一的な音色を持ち、ポータブルなフル・レバーの34弦ハープとして、オグデンは世に出ました。1オクターブと2オクターブにナイロン、3〜5オクターブにペダルガット、5〜6にコンサート・テンションワイヤーを使用し、ペダル・テンションで弦が張られています。実際に弾いてみると、豊かな鳴りが印象的で、レスポンスの良さと深みのある音色に、すぐに虜（とりこ）になってしまうでしょう。ナチュラル、マホガニー、エボニーのカラーバリエーションがあり、正確なグリップで演奏に貢献するパフォーマンスレバーが装備されています。高さは、付属の10cmおよび20cmの脚を使用することで調節することができ、将来グランドハープへ転向を考える奏者には、まさに絶好の一台。発売当時は、弾き方の手引きと共に、教育者を通じて生徒へ渡り、それが速習に繋がったため絶賛を浴びたモデルでもあります。実績を背景に今もトップ・モデルであるため、安心して手にできるレバーハープです。

OGDEN

オグデン